強さを求めて

１１０４

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
強さを求めて

【Ｎコード】
Ｎ８６３８Ｚ

【作者名】
１１０４

【あらすじ】
ネギまに転生した主人公
しかし、父親はあの人だった！？
ネギまともう一つの世界が交差する世界
そんな世界でなんとなく生きる主人公の物語です

調子に乗って書いてみた

プロローグ（前書き）

最近、他の作品の更新が止まっているくせに執筆しました
前の作品を読んでいらっしゃった方々には申し訳ありません
こちらはがんばります！！

プロローグ

唐突だか、俺は転生した

いやね、まあ、前の世界では曲がりなりにも普通に大学生活を送っていたわけですよ。それが、俺が歩いていたら偶然隕石が俺の頭をぶち抜き、その隕石が原因で起こった地割れに巻き込まれ、俺の体はマントルに吸い込まれたらしい。らしいというのは死んだあとに会った神（自称）に教えてもらったからなんだけどね。それで、転生させてもらえると言われたときは嬉しかったよ。でもさ～、転生する世界が完全ランダムでもらえる特典もランダムっていうのにはどうにも釈然としない。まあ、転生してしまったのだから仕方がない。それで、転生したのはネギまの世界。現在、麻帆良学園中等部の2年さ。どうにも原作組みと同年代らしい。あと、一番びっくりしたのは元々母親の顔しか知らない母子家庭だったのだが、父親があの範馬勇次郎と知ったときはかなり驚いたね。もちろん、アニキの範馬刃牙とも知り合ったよ。それで、いろんなことがあって勇次郎を倒すのを刃牙のアニキに預けて俺は普通に中学生してます。もちろん、いろんな戦いを見に行きましたよ。父親が勇次郎ってのもあったのか、最大トーナメントや大擂台賽を見に行ったりしましたよ。徳川のじいさんにも地下で闘わんか？なんて嬉しいこと言われて何回かでさせてもらってます。一応、勝てるには勝てるけど、刃牙のアニキには勝ち方が劣るんだよな～。マホメド・アライＪｒ．に勝った感じで勝ってみたいね。アニキにもちょくちょく会ってるけど、もっと鍛えたほうがいいって言われるし、その前にいろんな人に言われてるんだよな。お前の身長に対して筋肉のつき方が足りないって。そうそう、この前会って一番びっくりしたのはジャック兄さんね。一応、気にしてウェイトトレーニングをやってんだけどな～。それで、この前アニキに会ったときに、やっとそれらしい体

になったて言われたんだよな。アレは嬉しかった、病院でだけど・・・さっき言ったけど、たまに地下闘技場で闘わせて貰ってるんだけどね。どうにも、怪我が多くてよく病院にお世話になってるんだよな～。それが原因で現在出席日数がやばいです、はい。今は足りない日数分の補習の帰りです。幸い、もとは大学生の頭なので中学生のテスト程度は余裕でどうにかなってます。なんで、ある程度は補習も軽減されてますね。そろそろ、先生方にもばれるころかな～とか思いながらも範馬ではなく母親の播磨を名乗って生活してます。そうそう、名乗り遅れてたけど播磨力（はりまりき）、本名範馬力です

そんな俺は、補習帰りの途中鬼に襲われました
ネギまの世界だな～とか思いながら成り行き任せでいると鬼が「悪いが、見られたもんは仕方ない死んでもらうで」なんて言いながら金棒振り下ろすもんだから消力使ってそれをいなして、もっかい消力使って鬼のどてっぱらぶち抜くつもりで殴ったら消えました
「どうしようか…早く帰ろう」
その場から自分の出せる目一杯の速度で逃げました
その場から3分以内に逃げれば捕まんないって言われたけど、あれってホントかな？
アレ嘘だし、なんか長い日本刀を突きつけられてます
「お前は、何者だ！？」
「だから、通りすがりの一般人ですって」
「嘘をつくな！一般人が鬼を倒せるはずがないだろう！大方、お嬢様を誘拐しに来た違う派閥の者達が偶然居合わせてしまったのだろう。違うか！？」
そんなことドヤ顔で言われても困ります
「だから、そんなんじゃないですって！男子中等部２－Ｂの播磨力です、確認してもらえば分かるはずです！」
そこからは水掛け論。相手が不審者だといえばこちらが違うと言い張る

しかしながら、相手の持っている武器が悪かった。長い刀から逃げるようにじりじりと後ろに下がっていったが、背が壁についてしまった

「それ、もう逃げ道はないぞ。命が惜しくばキリキリ吐くがいい」

うっわ～、どS顔だし、ドヤ顔だし。はてしなくイラッっとくるな～

「お嬢様って誰ですか！？こっちは学校帰りです、ただの！」

「ただの学校帰りが、鬼など倒せるか！！」

なんか、このやり取りも疲れたな～。俺が認めたら終わるんだろうか？それならば、認めてしまったほうが・・・はっ、いかんいかん。こんな感じで冤罪は増えていくのだろうと思っていると、なんか人が跳んで来た

「刹那くん、その子は誰だい？」

うわ、デスメガネだ。生で見たのは初めてだよ

「不審者です、この手で確保しました！」

相変わらずドヤ顔で僕に長刀を向けながら言う刹那と呼ばれた女生徒

「ですから、俺は不審者なんかじゃないですって！男子中等部２－Ｂの播磨力です！」

「ちょっと待ってて、確認取るから」

そう言って、デスメガネはどこかに電話をかける

「高畑先生、そんな事をしなくてもこやつは…播磨力？・・・古菲（クーフェイ）がよく言っているやつか？」

「そうです！その播磨力です…って、え？くーふぇいさんのこと知ってるんですか？」

ってか、何回も播磨力って言ってるんだから気づいて欲しかったな・・・哀しくなんかないよ

そうそう、くーふぇいさんとは強くなりたいって思って親父やアニキがしてたみたいにいろんな武術系の部活とかサークル、同好会に道場破り的なことしてたら知り合って、事あるごとに試合を申し込まれてます。ったく、こっちは筋力の増強しないといけないのに。

まあ、そこでうんと頷いちゃうのは相手が美少女だからかな。もし

かしたら、気があるのかもしれない。っと、話がずれたか。まあ、そんなこんなでくーふぇいさんの修行に付き合ったりしてます。え？勝率？３：７であっちが勝ってます。そりゃね、中学生の女の子相手に水月打ちとか紐切りとかできませんって。はい、すいません。俺がチキンなだけです。ただ、本気の試合とかなったら使いますよ。現に地下闘技場ではバンバン使ってますしね。折角の技術使わず錆付かせるのはもったいないからね。

「もちろん、古菲は私のクラスメイトだ」

相変わらずのドヤ顔

「刹那くん、確認取れたよ。彼は正真正銘ただの留年しかけている一般生徒だよ」

「すみません、高畑先生。こちらの方で勘違いだということも分かりました。お手数をおかけしました」

「じゃあ、疑いが晴れたのなら俺帰りますね。それじゃ」

ダッシュをかける俺

その様子をポカンとした様子で見送る二人

俺は、前の日の俺に言いたい何故俺は逃げたのか！？と。なぜって？そりゃ、次の日に担任の先生から学園長のところ行くよう言われましたよ。そのとき先生がおい、お前何したんだよ的な目で見てたのは忘れません

まあいいや、もうネギも赴任してるみたいだし。女子中等部に出向くとしますか

プロローグ（後書き）

どうでしたか？
力くんは前の世界でちょろちょろっとしかネギまの原作を読んだことありません
原作キャラの名前と魔法はどんなのか的な漠然とした知識しかありません

設定（前書き）

そのまんまです

設定

とりあえず設定
世界観：ネギまの世界にグラップラー刃牙の世界をぶち込んだ世界
主人公設定
Ｆａｔｅっぽくステータス表示　（）内は気による強化後
クラス：グラップラー（格闘家）
真名：範馬力
性別：男
身長・体重：１７０ｃｍ、６８ｋｇ（成長中のため推定）
属性：混沌・善
筋力　Ｂ＋（Ａ＋）　耐久　Ｂ（Ａ）
俊敏　Ｂ（Ａ）　魔力　Ｅ
幸運　Ｃ＋　宝具　Ｅ　（てか無い）
保有スキル
範馬の血：Ａ　この世で最も濃い液体。コレがある限り闘争からは逃げることができない。武の才としては考え得る限りの最高のモノ
戦闘続行：Ｂ　往生際が悪い
原作知識：Ｃ　基本はランク上位のものだが本人があまり覚えていないためこの程度のランク（作者がこの設定よく忘れますｗｗｗ）
容姿
黒髪、黒目の一般的な日本人的な容貌。短髪をそのまま立たせている（剛毛のためワックスなどは不要）
整っているといえば整っている顔、視力は両目２．０以上なのだが学内では眼鏡着用
服装
学ラン姿が多い
私服もラフなものが多い（フード付の衣服が多い）
いわゆる戦闘服というものは無く、胴着も着ない

性格やら何やら
基本的に受身な性格
母親が世界各地を喧嘩旅行しているときに勇次郎と出会い、母親が一目ぼれ
そのまま勇次郎との間に子ができる
刃牙は生まれているため、刃牙とは異母兄弟の設定
現在、神の子激突編までは終了している刃牙の世界
ある程度、刃牙のほうは原作とはずれが生じつつある
そして、主人公はネギまの原作をいまいち知らないため、原作に関わっている自覚もなけりゃ、原作ブレイクしてる自覚もない
といっても、物語は原作通りに進む
原作乖離のようなことはまず起こらない…はず（作者の考えが甘いため）
原作準拠のストーリーが進む予定

設定（後書き）

おいおい、いろいろな設定を追加していこうと思います
疑問があったら感想のほうに書いていただけるとこちらに追加で書いていこうと思います

書いて早々改訂

第一話～強さへの欲望～（前書き）

連日投稿！！
この調子でポンポン上げていきたいです

第一話～強さへの欲望～

そんなこんなで、現在、学園長室のある麻帆良学園女子中等部へと歩みを進めていた
あっれ～？学園長室ってどこにあんだろ～？
「ちょっと、アンタ！！」
迷ったな～、どうしようか。ここは思い切って人に聞くしかないよな～
「無視してじゃないわよ！！」
っと、あぶね～。一発貰うとこだった
「避けてんじゃないわよ！！」
う～ん、ここ最近運が悪いな～。お払い行こうかな…そうか、コレが原作補正なのかな。それにしても、神楽坂アスナに怒鳴られるってテンプレなのかな～？なんて思いつつ聞いてみる
「学園長室の場所って分かる？」
「ハァ、いきなり何よ！？」
「ああ、それなら分かるえ。よかったら、案内するえ～」
「別にいいよ。場所さえ分かればいいし」
「わかったえ～」
近衛木乃香に聞いた場所に向かって歩みを進める
まあ、なんとも言えない雰囲気。女子部に男子がいるからな～。いろんな方向からの視線が痛いこと痛いこと
やっと着いたぜ、学園長室。案外扉は普通なんだな～
「男子中等部２－Ｂの播磨です。入ります」
そのまま入る
「お主が播磨くんかの？」
「違いありません」

「今日、お主を呼んだことの理由はお主も分かっていると思うが、昨日のことじゃ」
「ああ、あの鬼のことですね」
「そうじゃ。お主にはこの後二つの道がある。一つは昨日のことを忘れてこのまま、ただの学生としてこのまま学校生活を送ることじゃ。そして、もう一つは昨日のことを忘れずこの学園のために活動してもらうのどちらかじゃ。こちらとしては、昨日の事もあるのでお主には後者を選択してもらいたいの」
ホッホッホッホッホと笑う学園長
「まあ、おｒ・・・自分としては構いませんよ。で、学園のために活動っていうのは、主に何をするんですか？」
「簡単に言えば、学園の警備が主じゃな」
「はあ、警備ですか」
「腑に落ちないという顔をしておるの。理由は昨日も見たじゃろ？あのような鬼が度々この学園に刺客として送り込まれるのじゃよ。この学園には表や裏の長の御子息、御息女が多かれ少なかれ在籍しておるからの」
「へ～、そうなんですか～」
「まあ、お主もおいおい分かるじゃろ。しからば、お主には今日の夜に世界樹の前の広場に来て欲しいのじゃが、よいかの？」
「はい、大丈夫です」
「では、わしからは以上じゃ」
「そうですか。では、失礼します」
そう言って部屋を出る俺

――――力の出た後の部屋
「彼について、どう思う？タカミチくん？」
「今のところはなんとも言えないです。何せ、情報が少ないですから」
苦笑しながら答えるタカミチ

「うむ、君たちからの彼の報告書にも書いてあるが、父は無し。母の手一つで育てられ、母が過労で死んだため、この学園に来た。ここまでは、一人の悲しき孤児じゃ。しかしの～、この学費や生活費の出所があの徳川家じゃからの～。どこで、どう行けばあの徳川家が一人の中学生を支援するのか分からんわい」
「そこも、調べているんですが…どうにも、厳しく情報規制があるみたいで、あの子の口からじゃないと厳しいですね」
「そうか、結局のところは彼が自分から身の上を話すまで分からんのじゃな」
ため息をつく学園長
「あと、気になるのはあの子の入院暦ですね。平均すると約2ヶ月に一回は入院しているという結果が出ています。注意して思い出せば、よくギブスをしているのを思い出します」
「うむ、そのあたりも彼しだいということじゃ」
「そうですね、学園長」
彼らは、東京ドームの地下闘技場のことを知らない

とりあえず、夜になったんで世界樹前広場に行きたいと思う
あの後、いろんな視線を浴びながら帰ってたら、くーふぇいさんに絡まれ、そのまま試合風の稽古をして帰りました
晩飯も食べたし、大丈夫だろう

さて、世界樹前広場に着きました。う～ん、周りの人の視線が痛い
「今日から、学園の警備などの当たってもらう播磨力くんじゃ」
と、学園長に背中を押され一歩前に出る
「ご紹介に預かりました播磨力です。若輩者ですが精一杯がんばりますので、どうぞご鞭撻の程よろしくおねがいします」
頭を下げる俺
「そこでじゃ、今宵は幸い襲撃もない、彼の実力を調べたいと思う。

大丈夫か、播磨くん？」
「あ、はい。大丈夫です」
「では、高音くん。彼の相手をしてやってくれい」
「わかりました、学園長」
お～、この人か。ウルスラの脱げ女
「よろしくお願いします」
「おや、ではこちらもよろしくお願いします」
頭を下げる俺に対し、少し頭を下げる高音
「それでは…はじめ！！」
と言ってもどうしようかな～…とりあえず近づかないことには始まんないしな
持てる脚力全てを使い高音に近づく力。しかし、それは高音が繰り出す影の槍によって防がれる
ちっ、暗いとどこに影があるか分からんから避け辛い
「なかなか、やりますね。最初の瞬動術には肝を冷やしました」
瞬動術？何じゃそりゃ？
「ですが、こちらも負けるわけにはいきませんので、こちらもそれ相応の魔法でお相手します！！」
おお、向こうさんのテンションが右肩上がりだ
「出でよ、黒衣の夜想曲！！」
高音を守るように巨大な仮面をした黒いモノが出てくる
「おお～！魔法ってスゲー」
クハハハハハと自然ともれる笑い
「何がおかしくていらっしゃるの！？」
「そりゃさ、親父とアニキ達が強いのは分かってるけどよ、仲間はずれは寂しいじゃん。やっと、これでよ、あいつらを仲間はずれにできるって思うとな～。コレは笑わないわけにはいかないよな～」
父と兄達が自分の知らないところで闘うことへの嫉妬（ジェラシー）…それこそが、かれ播磨力、範馬力の活動意欲であり、彼が地下闘技場で闘う理由だ。父に追いつきたい、兄達に追いつきたい。その思いが彼を闘争

の道へと走らせ、節操無くありとあらゆる技術を模倣する結果となる。そして、今彼は父と兄達が知りえない世界へと足を踏み入れたのだった。その事態に彼の脳は脳内麻薬（エンドルフィン）を出し始め、彼の運動能力を向上させる
力が走り・・・前蹴りを打ち込む。それは、影の防御に守られる。守られたということを無視し、そのまま攻め続ける力。だが、影により吹き飛ばされ地面を転がり、壁に激突する
「クハハハハハ！！」
笑う力。そこに追い討ちをかけようとする高音
「だよな～、やっぱり闘いはこうでなくちゃいけない！最近、どうにも温くて困ってたんだよ！」
彼は立ち上がり、壁に足の裏をつけそのまま激突した
これは、後にピクルと呼ばれる原人が刃牙相手に使用する技だが彼はまだこのことを知らない。しかし、彼の場合は両腕を前に突き出す形をとっているのでピクルのとは少し形が変わっているので、かれのオリジナルで概ね正解であろう
「おいおい、コレも防がれるとはな～。まあいいや、腕一本でも貫通すれば問題ない」
そのまま黒衣の防御を貫通した腕を高音の顎の近くで振る
崩れ落ちる高音
「ふ～ん、魔法とは言っても脳を揺らされることに対しては無防備か。しょうがない、人体だ」
一人考察をする俺。っと、いけないいけない。闘った後、相手ほっといて考える癖いい加減治さないとな
「あ、あんま触んないほうがいいですよ。あ、そうそう横にして、3分ほどで目が覚めると思うんで。心配しなくても命に別状は無いですし、後遺症もありませんよ」

―――とある悪の魔法使いの感想
ククククク、偶の集会に来てみるのも悪くない。全く、面白いヤツだ。いきなり瞬動術を使って殴りかかったかと思えば、吹き飛ばされ私を落胆させた後にまさか、あのような技を使うとはな。なんだ、ここにもまだ面白い人間がいたもんだ。そういえば、播磨力と言えば…うちのクラスの古菲がよく出す名前だな。あとで、茶々丸に情報を集めさせておくか

―――周りで見ていた者達
「うむ、今のは良い加速じゃ」
「学園長、今のは瞬動術ではないのですか？」
「ガンドルフィーニくん、それは違うぞ。なぜなら、彼はつい昨日魔法の存在を知ったのじゃからな。そんな人間が気による強化も無しに瞬動術など使えるはずが無かろう」
周囲の人間の動きが止まる
「それでは、播磨は身体能力のみであの動きをしたというのですか？」
「そうじゃ鏑木くん」
「アイツの身体能力がそこまでとは、驚きです」
「あの子は鏑木先生のクラスでしたね」
「ええ、かなり怪我をしやすい人間だという認識しかありませんでしたよ」
「う～ん、人間が魔法や気による強化無しであの速さとは・・・正直不気味ですね」
「ですね。私は、アレは鬼か何かの加護を受けてるとしか思えません」
「うむ、後でそのことは彼に聞いてみるのが一番じゃろ」

「え？さっきのパンチ？」

桜咲刹那に声をかけられた。どうやら、さっきのパンチについて聞きたいらしい
「はい。さっきのアレは寸剄ですね」
「ああ、まあ。俺はノーインチパンチって言って教わったんすけど」
「どこで、その技術を？」
「どこだったけな？たしか、アメリカのちっちゃなボクシングジムだった気がします。その人も、どっかの中国人に教えてもらったとか何とか」
「教わった場所を忘れたとはどういうことですか！？」
「あの頃はがむしゃらに強くなりたいと思っていただけで、場所はどうでもよかったんですよね～」
そううだよな～、世界廻ったな～
アメリカ、ロシア、中国・・・世界の中枢国家はほとんど行ったんじゃないかな？目的？喧嘩。主に母親の。なんで、世界各地を廻って喧嘩しにゃならんのじゃ。母親が喧嘩しに行く間に色んなジムやら道場に預けられてました。あの人、今どこで何してるのかな～？命がやばいとか言って死亡届出して逃げて、徳川のじっちゃんに頼んで新しい戸籍貰ってたな・・・どんだけ人望あんだあの人
「あの、最後の瞬動術を用いた体当たりには感服いたしました。あのような使い方もあるんですね」
「さっきから、しゅんどうじゅつ？って言われるけど、何ですかそれ？」
あれ、固まったぞ
「で、では、瞬動術ではなくただの脚力であの速さと・・・」
「だから、瞬動術って何ですか？」
「瞬動術と言うのは魔力や気によって脚力を強化する技術です」
「いわゆるピリオムですね。いや、どっちかって言うとヘイストか？」
「ぴりおむ？へいすと？よく分かりませんが、足先に魔力や気を集め爆発的な加速力を手に入れる技です」

「そうですか、じゃあピリオムやヘイストみたいな自分の速さを上げるわけじゃないんですね。その場だけの爆発的な加速か～。この前アニキが見せてくれた蜚？ダッシュみたいだな～」
「ご、ゴキブリですか・・・」
「だって、ゴキブリってスタートダッシュからトップスピードで走れるんですよ。そりゃ、蜚？ダッシュみたいって言われても仕方ないでしょう。ってか、その技創った人もゴキブリ見て創ったんじゃないですかね？」
「そんなことは・・・」
「どっちでも、技術は技術です。使えるようになりたいですね」
会得したらアニキに自慢できるし
「そうですか」
すると、学園長が近づいてくる
「コレで分かったように、彼も十分力を持っておる。これからは彼も我々の一員じゃ」
頷く面々
ブルッ
うわ、なんか嫌な感じした

この悪寒が本当に悪いことを引き込むとは今の彼が知る由もなかった・・・

第一話～強さへの欲望～（後書き）

どうでしたか？
力くんはまだ気の存在を知りません
原作知識が適当なせいですね
あと、刃牙はこの時点でゴキブリダッシュを使えます
開発した業をちょくちょく弟に見せつけてるわけです

第二話～気～（前書き）

刃牙読んでたら次の日になってた
まあ、この調子で次もあげたいな～（遠い目）

第二話～気～

う～ん、今日は変な日です。朝、下駄箱に入っていた手紙に放課後屋上に来て欲しいという旨のことが書いてあったため、来てみたはいいんですが誰も来ません。うん、いたずらです。この事をクラスの奴に言ったら可愛そうにと、ジュースをおごってもらいました。そこまではいいんです。次に、寮の部屋に戻って今日の分の鍛錬をしていたらドアがノックされて玄関に行ってみると同じような手紙がありました。そこには、ここに来いとご丁寧に地図も着いていました。そのあと、鍛錬を終わらせてその地図にある所まで行きました。それで、指定の場所へ来たのはいいんですが・・・なんか変な家の前にいます

今は、どうした物か迷っています

う～ん、声をかけるのか？インターフォンがあるようには見えないし・・・それにしても、ログハウスか・・・こんな家に住んでみたいって母ちゃんは言ってったっけか

まあいいや、とりあえずドアをドンドンしてみよう

扉を叩こうとして近づくと扉が開き、一人の女性が出てきた

あ、こいつ、茶々丸だ

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへマスターがお待ちです」

ほんとに、マスターって呼ぶんだ。それにしても抑揚の無い声だな・・・やっぱ、ロボットって感じがするな

「はあ、お邪魔します」

そう言って家に入る。案内されたその先にはネグリジェを着た幼女が偉そうに紅茶を飲んでいた

「よく来たな、播磨力。いや、範馬力と呼んだほうがいいか？」

意地の悪そうな笑みを浮かべながら俺の本名を告げるエバンジェリン

「おや？俺の本名はあまり出回って無いはずなんですけどね～。どこから、その名前を？」

「知ってどうするつもりだ？」
「知り合いだったら、イタ電しまくります」
「ククク・・・面白い奴だ。なあに、簡単なことだよ。少しばかり徳川のデータベーズに進入して見つけたよ」
「あ～。それなら仕方ないですね」
「どうだ？母親は元気か？」
「知りませんね～。どっかで元気にやってるとは思うんですが・・・なにせ、世間では死んだ者となってますし。それにしても、うちの母親と知り合いで？」
「少しな」
遠い目をするエヴァンジェリン。この人も、あの母親に苦労させられた人なのかな？５歳児に本格的なスパーする人だもんな
「で、俺を呼んだ理由は？えーと・・・「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル」じゃあ、エヴァンジェリンさんですね」
「簡単だよ。どうだ？私に師事してみないか？」
「するといい事ありますか？」
「昨日言われていた瞬動術を会得きる。その他、魔法使いに対抗できる技術を手に入れることができる。貴様の父親に勝つことも可能だぞ？」
「それなら、弟子になりましょうかね～。ああそうそう、父親のことは兄に一任してあるんで興味ないですよ。それに、俺はどれだけ技術を会得しても親父には勝てないですし」
「ほう、それは何故だ？」
「闘うと結果がどうあれ母に殺されます」
「そうか・・・」
どうやら納得してくれたようだ
「それで、お前はどれぐらいこの世界について知っている？」
「何も。知ったのがつい昨日みたいな感じですから」
「そうか・・・（ということは、どのようにでも染められるということだな）ククククク」

うわ、何この人急に笑い出したよ
「ちょっと、ついて来い」
立ち上がり、違う部屋へ行こうとするエヴァンジェリン
「え、ちょ、まっ！」
慌ててついて行く俺

ついて行くとそこには一つ大きなボトルシップのような物があった。
ようなとは、ビンの中には船ではなく精巧なミニチュアの城があったためである
これが別荘ね～
「そこに立て」
「あ、はい」
あくまでも、これから起こることは知らない風を装う
姿が消える。思わず目を閉じる

目を開けるとそこには幻想的な空間が広がっていた
「おおおおお」
思わず声を上げる
「どうだ、驚いたか」
ドヤ顔でエヴァンジェリンが答える。それにしても、この世界の人はよくドヤ顔するな
「コレも魔法で？」
「もちろんだ」
「へ～。これって、外に出るのはどうすればいいんですか？」
「1日経てば外に出られる」
「へ～一日・・・一日！？」
「ククク…。心配するな、ここの一日は外での一時間だ」
「ああ、そうですか」
がちで、一日の場合は本格的にやばいのだ・・・進級が
「まあ、立ち話もなんだこっちに来い」

さっさと奥に行くエヴァンジェリン

「さて、コレで魔法を使ってみろ」
小さな杖を渡される
「コレでどうしろと？」
「コレを振りながら『プラクテビギ・ナル火よ灯れ（アールデスカット）』と唱えてみろ。お前に魔法の才能があったら火がでるかもしれん」
「はあ」
とりあえずがんばってみる

2時間後
「み、みごとに、で、でないな。ククククク・・・・」
笑いをこらえながら俺に言うエヴァンジェリン
「う～ん、でないっすな～」
別に魔法を使うことに興味は無いのでいいです
「まあいい。別に魔法のことはお前に期待していない」
「じゃあ、なんでやらしたよ？」
「あ？なんか言ったか？」
「別に～。ヒュ～♪」
この2時間でだいぶ距離感も縮まったかな？
「とりあえず、お前には気の使い方をマスターしてもらう」
「おお、待ってました」
「とりあえず気についてな。簡単に言うと、人間の体内に秘められた生命エネルギーのことだ。コレを用いることで身体能力の向上をすることができる。中には厳しい修行により自然と体得する化け物のような一般人もいるがな」
あ～、これ確実に親父気を使えるな。わざと使ってないだけで絶対使えるなコレ
「へ～」
「言っとくがお前も使える一歩手前のようなところにいるんだから

な」
「どうやれば使えるえるんですか～？」
「ふむ・・・体の中に抑えつけてあるものがあり、それを一気に毛穴から噴出させる、というイメージでやってみろ」
「は～い」
とりあえず、そんなイメージでやってみる。例えの表現が某ハンター漫画の念のイメージみたいだな
なんか、でてきた
「なんか、出てきたっす」
「それでいい（まさか、こんなに早く出るとはな・・・あの例えハンターハンターのオマージュなだけなのだが）」
彼の思ったことは概ね正解のようだ
「では、その出てきたものを足の裏に集中させてみろ」
彼の姿か消え5、6m先に現れる
「おお、簡単に蜚？ダッシュができた」
「それが、瞬動術だ。ここから先の奴らは大方それを使ってくるからな・・・って聞いてないな」
彼の姿が消えたり出たりする光景が広がっている。姿と姿の間隔がドンドン広がる

1時間後
別荘のいたるところに彼の姿が映る
「この調子だと虚空瞬動術もマスターしたようだな（正直ここまでとは思わなかった）。おい、いい加減にしろ！戻って来い！」
その声に彼の分身が消えエヴァンジェリンのもとに現れる
「呼んだ？」
だいぶ疲れているようだ。大量の汗をかき、ひざに手をついてはーはー言っている
「その様子だ。体も温まっただろう？私と模擬戦だ」
「おっす」

広いところに移動する
「よし、どこからでも攻めて来い。遠慮は要らんぞ」
「押忍」
彼の姿が消え、エヴァンジェリンの目の前に現れ拳を打つ。しかし、その拳を獲られ投げられる
「ほ～、合気道ですか。渋いっすな～。これほどの技術一体どこで？」
「１００年前にちんちくりんのおっさんに教わった」
ここは反応しておこう
「１００年前？・・・へ？１００年？？」
目を点にする
「おや、言ってなかったか？私は６００年の時を生きる吸血鬼。エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさ」
「ほ～、吸血鬼っすか～。ファンタジーすな。それにしても、それほどの合気道の技術・・・まさか渋川さんほどの技術を持った人は初めてです」
「ふん、興が削がれた。今日はここまでだ。お前も疲れただろう。時間がくるまで休むがいい」
「そうさせて貰いますよっと」

時間一杯休んで別荘の外に出ました
「じゃあ、俺はこの辺で」
帰ろうとすると声をかけられる
「あの別荘を利用したくなったら来るといい。いつでも使わせてやる」
「どうもありがとうございます。それではまた」

力が出て行った後のエヴァンジェリン宅

「お帰りになられたのですか、マスター？」
「ああ」
エヴァンジェリンを見つめる茶々丸
「どうした、私の顔に何かついているか？」
「いえ、マスターの顔が楽しそうだったのと頬に傷がついていたので」
頬に手を当てるエヴァンジェリン。確かに、彼女の頬には傷がついていた
「ほ～、やるな。あいつも、油断していたつもりは無いのだがな。全く、面白い人間だよ」
「マスターが楽しんでおられるようで何よりです」

こうして、播磨力が気を使えるようになったのであった
いまだに、彼は主人公ネギ・スプリングフィールドと会っていない

第二話～気～（後書き）

どうでしたか？
力くんには魔力がほとんど無いし、才能もありません
気は上の中クラスで使いこなせます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8638z/

強さを求めて

2011年12月29日02時58分発行